

## 『46番目の密室』

有栖川 有栖／著 講談社（1992年）

作家の有栖川有栖と友人の犯罪学者、火村英生は、真壁聖一からクリスマスに北軽井沢の家に招待された。真壁聖一は作家だが、駆け出しの有栖川とは違い、〈密室の巨匠〉と呼ばれている大御所だ。そして、クリスマス之夜、その家に招待された客たちは、実際に密室の中の遺体を発見する。はたしてトリックは何なのか？有栖川有栖の代表作「火村シリーズ」の第一作、本格ミステリーです。



## 『おしまいのデート』

瀬尾 まいこ／著 集英社（2011年）

作者の瀬尾まいこさんは、中学校で国語教師をしていて小説家となった方なので、おはなしにも、YA世代が多く登場します。

この本は、タイトルを見ると悲しい別れの物語を想像してしまいがちですが、おしまいと言っても何かのはじまりだったりするようなほんのり温かい気持ちになれるおはなしです。

祖父と孫、元不良と老教師、協力して一緒に公園で犬を飼うOLと男子学生等の5つのデート、皆さんも楽しんでください。



## 『わたしの恋人』

藤野 恵美／著  
KADOKAWA（2014年）

高校一年生の龍樹<sup>りゅうき</sup>はまだ恋をしたことがない、彼女いない歴＝年齢。でも、運命の相手にいつか出会えることを信じていて、好きな子ができたら、すごく大事にしたいなあって考えてる。そんな龍樹が保健室で出会った少女、森せつなにひとめぼれした。素直な龍樹と、不器用なせつなのボーイ・ミーツ・ガールなラブストーリー。初めてのデートや些細なすれ違い…恋っていいなと思う一冊です。

## 『わくらば日記』

朱川 湊人／著 角川書店（2005年）

昭和30年代、東京下町で暮らす姉妹の物語。和歌子はしなやかで美しい姉の鈴音<sup>りんね</sup>が大好きでした。ある日姉から特別な秘密を打ち明けられますが、憧れていた交番の巡査に話してしまいます。その“人や物の過去が見える”力で、ある事件を解決に導いたことから、次の難事件の協力を依頼される事に…。他に、流星塵<sup>じん</sup>を研究している大学生との淡い恋の話など、同姉妹の5つの話が載っています。続編の「わくらば追慕抄」もおすすめです。

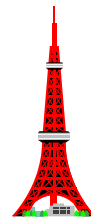


## 『よう知らんけど日記』

柴崎 友香／著  
京阪神Lマガジン（2013年）

1973年生まれ。『その街の今は』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、織田作之助大賞、咲くやこの花賞を受賞、『寝ても覚めても』で野間文芸新人賞受賞、『春の庭』で芥川賞受賞と、今実力も勢いもある作家です。

『よう知らんけど日記』は作者が日々思うこと、感じたことを大阪弁でつぶっています（ボヤいています）。現在、東京に住んでいるからこそ感じる関西との違いなど、おもしろい話がいっぱいです。



## 『探偵倶楽部』

東野 圭吾／著 角川書店（2005年）

1958年生まれ。数々の作品がドラマ化・映画化される、ベストセラー作家です。

「探偵倶楽部」とは会員制の調査機関です。優秀な探偵たちが迅速に、難事件を解決します。短編集なので、どこから読んでも楽しめます。期待に応える探偵の仕事ぶりにあなたも満足されることでしょう。ただし、探偵の使い方を間違えると手痛いしっぺ返しにあうかもしれません。